

Z会東大進学教室

高1 東大国語



# 1章

## 【問題】(演習)

出典…本田和子かずこの文章 / 立教大学

### 文章略解

子どもは何でも口にくくみ、のみこもうとするが、それは口によって世界を把握するという「口の文化」に生きていることを意味している。子どもは「たべる」ことにより、さらには「たべられる」ことによって、他者と同化しようとしているのである。

### 解答

問 1 ① 〓 周知      ② 〓 依拠      ③ 〓 序列化

問 2 (エ)

問 3 子どもは口によって外界と同化し、世界を把握しているから。〔28字・解答例〕

問 4 彼らとの同化を肯定した証〔12字・23行目〕

問 5 (ア) 〓 2      (イ) 〓 2      (ウ) 〓 1      (エ) 〓 1

出典：田中美知太郎『良識について』／九州大学・一部改

文章略解

自分個人の立場に立って、常識をうまく利用しながら、なお利己主義に陥らず、大局的な見地からものを見る智慧、それを良識と呼ぶべきである。良識が盲目的な利己主義から脱却し大局的な見地に立つためには、幅広い知識を与えてくれる常識が不可欠だ。しかし一方、良識が直面するのは日常の個別的・現実的な場面であるから、良識が実際の判断力を持つためには、常識の一般的・公式的な側面に捉われない柔軟さが必要である。つまり、常識に縛られない自由な心が良識と言える。

解答

問1 ①〓探偵 ②〓皮肉 ③〓強(いられて) ④〓大規模 ⑤〓対処

問2 A〓ウ B〓カ C〓イ D〓エ E〓オ

問3 常識を単なる常識のままに止めることなく、我々自身の立場に立ってうまく利用する智慧を、良識として認識すべきである。

[56字・解答例]

問4 良識は、広い関連の中で、いろいろな手段を大局的に選び取る道を教えてくれるから。〔39字・解答例〕

問5 生得の小さな利己主義をうまく馴らし、良識によってそれを広く大きく活用できる人。〔39字・解答例〕

問2 空欄Aは直前の「一個の主人公」と並立の関係なので、これと同様の意味を持つ語を選べばよい。「他の一切から支配されず自立して」という意味の(ウ)が適当。

空欄Bの直前の「これは」は「何でも自分のために、うまく利用するという智慧」を指す。さらにこの語は、空欄の後で「小ざかしくたくらみ」と言い換えられている。この二つとイコールで結ばれ得るものといったら、(カ)の「利己主義の根源」しかない。「自分のために」⇨「利己主義」⇨「小ざかしくたくらみ」。

空欄Cは、その前の文脈が押さえられていれば簡単。「日常の生活において、常識をどううまく利用するか智慧がいつも求められているが、それが端的に表れるのが政治の世界である。」という流れが押さえられただろうか。

空欄Dの前の二文で、「高い所に立って、大局を見るの明がなければならない」「いろいろなものを、うまく組み合わせ、総合的に使用することができなければならない」という二点を、政治家に必要なものとして挙げている。空欄Dの主語は「良識」であり、「良識」⇨「政治家に必要なもの」であることから、空欄Dを含む一文は、前の二文のまとめになっていることが判る。空欄Dの直前が「高い所に立って、大局を見るの明がなければならない」に対応しているので、空欄Dは「いろいろなものを、うまく組み合わせ、総合的に使用することができなければならない」に対応していると考えられる。この意を表すのは、(エ)の「総合使用の妙」しかない。

空欄Eについては、「良識に E を要求している」⇨「良識のうちに理想的人間像のすべての徳が含まれている」の関係が押さえられれば、(オ)と簡単にわかる。

問3 傍線部を言い換える問題なので、まず傍線部に含まれている指示語を明らかにする必要がある。「この使用の智慧」とは、「常識をうまく利用する」才である。また、「そのありかを求む」の「その」が「良識」を指していることは明らかだ。したがって、ごく簡単に傍線部を言い換えると、「常識をうまく利用する智慧を、良識として認識すべきだ」となる。この文を核として、これに肉付けしたり、これをくだいたりして、指定字数に合わせればよい。設問に「判りやすく」(⇨具体的に)とあるので、本文を利用してよいだろう。本文からは、「常識をうまく利用する智慧」⇨「このように常識をうまく用いるあたま」、「良識として認識」⇨「常識そのものから区別」という対応がみつかる(傍線部①の直前に「良識」というものが、もし常識から区別されるものなら

という前提がある)。「常識をうまく用いる」は、直前の「常識はく生かされない」の逆位にあるので、これは「常識を常識のままに止めず、うまく利用する」と言えよう。また、この「智慧」、つまり常識から切り離された「真にわたしたち自身の立場に立つて、他のすべてのものを使用するあたま」が、「良識」となる。この二点を重ねて一文にすると、解答例のようになる。

#### 問4

傍線部(2)の前の文脈を辿ってみると、「……しかし単なる利己主義は良識ではない。むしろ良識が利己主義に脱皮を教える。」という文構造になっているので、傍線部の説明は、傍線部以下にあると判る。そこで傍線部のあとを見てみると、「わたしたちは良識によって……その盲目性を脱することになる」という文に目が止まるはず。「脱皮＝盲目性を脱する」なのである。この間に述べられていることは「ひろい関連のなかで、うまく用いる」ということである。これは第二段落では「大局を見るの明」「総合的に使用」などという言葉で言い換えられているものだ。従って、これらの語句をもとに、答えを作成することになる。答えの中心は「良識が……教えてくれるから」という形になり、これに「何を」に当たる説明を組み込むと、正解が得られる。

#### 問5

「利口な」のニュアンスを、どれだけ解答に生かせるかがポイントとなろう。問4の問題とも関連してくるが、前の文脈から「良識によって利己主義から脱皮できる」＝「利口な利己主義者」だと言えよう。

ここで筆者は、「利口」という言葉を積極的な肯定の意味には使っていない。「わたしたちの抜き難い利己主義」、つまり、人間は所詮利己主義から脱却することができないので、最善ではないが次の策として、「利口な利己主義者」になることでよしとしなければならぬ、と言っているのである。これを述べているのは、傍線部(2)の直後「正直に言っつゝほとんどできない」とその次の「わたしたちにうしろさすことだけ」「良識によってうまく用いられるように」の部分だ。これらを合わせて一文にすれば、これが傍線部(3)の実質的な内容になるものと判る。

## 【添削課題】

出典…中西進『日本語における不易と流行』／三重大学

## 文章略解

『源氏物語』のことばに代表される王朝語は、現代人には理解が難しくなってしまった。これは王朝語が変質したり消滅したからだというよりも、使い手である現代人の心が変質し、微妙な心の騷を言い表そうとしてきた古典人の心や美意識を喪失したからである。たとえば「やさし」のようにことば自体は存続していても、現代人の心の墮落によって自己の内面を省察する本来の心が欠落し、もっぱら自己中心的に相手や対象に責任や罪を転嫁する意識が流行し意味が変容している。ことばは不易なものから流行するものへと変質してしまったのだ。

## 解答

- 問1 (a) 継承 (b) 風情 (c) 翻案 (d) 欺 (e) 原義

問2 使い手である現代人が古典人の美意識を失ったために王朝語も消えたのだということ。〔39字・解答例〕

問3 今の「やさしさ」は自分を恥じるよりも自己中心的に相手にだけ要求することばだから。〔40字・解答例〕

問4 本来の自分の心の状態をいうことばから相手の状態だけを表すことばに変質すること。〔39字・解答例〕

## 特別問題

古来から現在まで「やさし」という言葉は存在し続けているが、その間に人々の心は墮落し、恥ずかしい、身の痩せる思いという意味から、今は「相手を傷つけないこと」を意味するように変化した。

出典：小川国夫『藁をも掴もうとする散歩』／明治大学・改

文章略解

旧制中学の頃から日課となった散歩には、小説家としての第二の本能とでもいふべき職業意識がつきまとっている。散歩には二つの利点、つまり観察と幻想の醸成もあると考える筆者であるが、その実情は、藁をもつかみだがつている自分の姿であるのかもしれない。この文章の展開は、典型的な「日常体験から思索へ導く」形のパターンである。前半で、自己の日常体験を提示し、その中の「周遊」という行為に意味づけを行いながら、「小説家」として意識や「ナイルデルタの牛」という体験などを織り混ぜつつ、内省を深めている。「ここまで書いてきて……」以降の後半部では、筆者の心内に想定された読者との対話という形で文章を展開し、新たな視点でより内省を深めるといふ形を採っている。この部分の自己の二分化（筆者と想定読者との対立）に注意して、読み進めたい。

解答

- 問 1 ① ㊦依然 ② ㊦算定 ③ ㊦よわい ④ ㊦くい ⑤ ㊦軸

- 問 2 (イ) 問 3 A ㊦オ B ㊦ウ 問 4 (ア)

問 5 目に触れるものをよすがとして、発想の手がかりを掴もうとするような意識。〔35字・解答例〕

- 問 6 (ウ) 問 7 D ㊦観察〔26行目〕 E ㊦幻想〔28行目〕 問 8 (エ)



問2 傍線部(1)がカッコで括られていることに注意。これは挿入句である。しかも、「つまり」が付いていることから「旧制中学」こへ来て今や」＝「四十五年をけみして」という関係がつかめる。冒頭からカッコ直前までを要約すると、「旧制中学のころに始めて、絶えることなく今に至ってついに」となる。そしてこれが「四十五年」なのである、といえよう。これを融合すると「旧制中学のころから四十五年間ずっと続けた今になって」となる。これと一致する選択肢は(イ)しかない。

なお、「けみする(閲する)」は「①あらためる②終わる・経過する」の意味を持つが、ここでは②の意味で使われている。

問3 空欄Aの直前と直後の内容関係を見ると、「周遊に適した地形」―「散歩に出た私は、知らぬ間にフット気がつく」と玄関に戻っている」となっている。後半で「散歩に出た」のに、「知らぬ間に戻っている」と言っているからには、何かしらの理由があると考えられよう。しかし、この直後は段落も話題も変わっているので、理由はこの直前、つまり「周遊に適した地形」しか考えられない。つまりここは、「原因」―「帰結」の順接関係になっているのだ。そこで選択肢を見てみると、順接の接続を行うものは(オ)しかない。

問4 「向き」にはいろいろな用法がある。傍線部(2)の「向き」は、自分に「反論する相手」ということから、「人」を表しているものと判る。選択肢の(イ)「表向き」は「表面」、(ウ)・(オ)は「適している」、(エ)は「方向・傾向」の意で、(ア)が「用のある人」の意である。

問5 傍線部(3)の直前に「つまり」とあるので、傍線部(3)は前の部分の言い換えであることがわかる。したがって、傍線部(3)を含む段落の前半部を三十五字以内でまとめればよい。ポイントとなるのは「職業」―「小説家」、「意識」―「気持ちの……持つて行き方」という対応である。つまり傍線部(3)は「小説家としての気持ちの持つて行き方がつきまとっている」と言い換えられる。この「気持ちのこの……仕方がない(＝つきまとっている)」の直前で「つまり」と説明されている「目に触れる……働き続けている」が、解答の中心。これをベースにまとめよう。

問6 空欄Cの直前に、「いわば」とあるので、その直前の「馴れ親しんだ……奪われていてはならない。」の部分の主旨と合致するものを選ばよ。 「馴れ親しんだ単調さに浸っていると、その無風状態の中に」↓「幻想が育つ」とある。その直後の一文も、「まわりの刺激に目を奪われなければ」↓「それ(幻影)が育つ」と言い換えて理解することができる。すなわち、新鮮味なく退屈に思えるような環境においてこそ、新たなものが見出されるということである。この文脈を持っている選択肢は(ウ)、「曇り日には」↓「物が良く見える」であることがわかる。

問7 空欄D・Eを含む段落は、筆者がそれ以前に述べたことに対して、読者がこうは思いはしないかということを書いた部分である(筆者の自問自答、と見ることもできよう)。空欄D・Eを含む一文を見てみると、「……君(＝筆者のことである)が散歩の果実」として誇ったいくつかの収穫は……」「散歩と切っても切れない関係」というように、散歩によって得られるもの(こと)についてのことが書かれている、と分かるだろう。当然空欄D・Eには、散歩の果実、つまり成果が入るわけである。ではその成果とは何かといえば、二つ前の段落(「しかし、……」で始まる)に書かれている。すなわち「……狭い範囲を繰り返し歩いていると、退屈する反面、観察がくわしくなるという利点がある。」と「第二の利点は、……その無風状態の中に幻想が育つ。」がそれである。注意することは、空欄Dの直前に「くわしい」という修飾語があるので、空欄Dの方に「観察」が入るという点である。空欄D・Eは順不同ではない。

問8 この問題は「そんな」の指示内容を問うものである。直前に、「内面について」とあることに注意したい。これに対して「抱くことができるのだろうか」と懐疑的に述べられていることから、傍線部(4)の二文前の「違う違う。」で否定されている内容を捉えればよいことが判る。その内容とは、「散歩が職業上の悩みを解決を与える万能薬」だと考えることだ。この「職業」は「小説を書く」ことなので、まとめた一文は、「小説を書く上での悩みすべてについて、散歩が解決手段となる錯覚」と言い換えられる。これを基に、選択肢を見てみよう。

(ア)……「祖父の幻」が現れることと「小説の悩み」に関連性はないので、真つ先に消せる。

(イ)……「幻想が見えてくる」は、「悩みの解決」ではない上に、前段の「彼は言うであろう。……関係があるのだろうか」で既に触れられている。

(ウ)……「職業意識がつままとう」は「悩み」にはなっても「解決手段」とは言えない。また、傍線部(4)を含む段落で「……職業意識がつままとう、と言っているのはいいとして」と、一応認めているので、不適切。

(エ)……「小説を書く上で不可欠なもの」は「悩みを解決してくれるから」という原因結果の関係を持つもの。

(オ)……外面について述べているので不適切。

以上のようにみると、(エ)が傍線部の指示内容についての結果を述べているので、関連性の大きなものと言えよう。したがって、(エ)が正解。

## 【問題】(演習)

出典：『十訓抄』／ オリジナル問題

## 現代語訳

西行法師が、俗世の男だった(「まだ出家前の」)時、かわいがっていた娘で、三、四歳になった娘が、重い病気にかかって、(命の)最後であったころ(「もう危篤だと言われていたころ」)、院の北面の武士(「院の御所を警備する武士」)たちが、弓を射て競い遊びあうこと(があつたのだが、それ)に(西行も)誘われて、(西行は)気乗りのしなのまま(それに加わり)騒いで一日を過ごしていたが、(その時)、郎等の男が走ってきて、(西行の)耳に何かささやいたのだが、事情を知らない人は、何とも思わない(「気にも留めない」)。西住法師は、まだ俗世の男(「出家前の男」)であつて、源次兵衛尉と名乗っていた(時だったのだ)が、(西行はその西住と)目を見合わせて、「このこと(「娘の死」)がすでに(訪れてしまいました)」と言つて、(他の)人も知らせず、平然としていて、少しも表情を変えることなくその場に居続けたのを、「立派な心ざまであつた」と、西住は後に人に語つたということだ。

## 解答

- 問1 ① かわいがっていた ② 騒いで ③ 立派な心ざま

- 問2 A 女 B 西行法師(西行) C 郎等男 D 西行法師(西行)

- 問3 西行の娘の死〔解答例〕

**問4** 西行が、かわいがっていた娘が死んでしまったという知らせを聞いても、周りの人に全く気づかれないほど取り乱さずに平然と  
していたことに対して。〔解答例〕

出典：『古本説話集』(上巻)「長能・道済の事 第二六」／ 神戸大学・一部改

現代語訳

今は昔、長能と道済といった歌人たちが、たいそう張り合って歌を詠んだということだ。長能は、『かげろふの日記』を書いた人の兄弟で、代々伝わった家柄の(「文学で知られた家柄の」)歌人、道済は、信明といった歌人の孫であって、(兩人とも)たいそう競い合っていたが、鷹狩の歌を二人が詠んだ際に、長能は、

あられ降る……あられが降る交野の御野で狩りをしたところ、狩り衣がすっかり濡れてしまったよ、宿を貸す人もないので詠み、道済は、

ぬれぬれも……濡れながらもなお狩りを続けていこう、はしたかの上羽につもる雪を打ち払いながらと詠んで、それぞれ、「自分の歌の方がまさっている」と主張しつつ、四条大納言の所へ二人で参上して、判定していただいたところ、大納言がおっしゃるには、「両方とも良い中で、あられであれば、宿を借りるほどまではどうして濡れようか。(長能の歌は)この辺が劣っている。歌の品格はよろしい。道済の歌は、見事に言つてのけたものだ。後の世にも勅撰集などに入るに違いない」と(という言葉が)あったので、道済は、舞いおどるように出て行った。長能は、もの思いに沈む様子で出て行った。これまでは何事につけても長能は上手をいっていたのに、今回は不本意に終わったということだった。

解答

問1 (藤原) 道綱母      問2 兄弟      問3 長能の歌と道済の歌

問4 (長能の歌について、) あられ程度ならば宿を借りるほど濡れるはずがないのに、宿を貸す人がないため狩り衣がびっしより濡れたと大袈裟に詠んでいるところ。〔解答例〕

問5 歌 問6 動詞「入る」の連用形＋助動詞「ぬ」の未然形＋助動詞「む」の終止形

問7 喜び〔解答例〕

解説

問2 漢字で書くと「兄人」(「せひと」から変化したものと考えられる)。年の上下に関係なく、女性から男性の兄弟を指す語。また、単に男の兄弟、特に兄を表す場合に用いられる語。

問3 傍線部(3)の少し前から文脈を追ってみよう。ライバル同士である長能と道済が、鷹狩の歌をそれぞれ詠む。二人とも「我がまきりたり」と、自分の歌の方が良いと譲らない。そこで、大納言のもとに行き「判せさせたまつる」となるわけである。当然何を判定するのと言え、長能の歌と道済の歌であろう。二人の歌を見た大納言は、こう言うのである。「ともによきにとりて……」と。この「ともに」は、当然「長能の歌と道済の歌」である。

問4 「ともによきにとりて」の「とりて」とは、「くに関して・くについて」の意味である。「両方とも良いにつけても／良い中で」とほめておいた上で、「こもと(＝この辺)ぞ劣りたる」と判定しているのである。したがって、「劣りたる」箇所とは「あられは、宿かるばかりはいかでぬれむぞ」の部分ということになる。「宿かる」とは、「宿を借りる」の意味である。「ばかり」は程度を示す語。「いかで」は反語である。つまり、「雨ならともかく『あられ』の場合は、宿を借りなければならない程どうして濡れようか、いや濡れるわけはあるまい」と批判しているのである。

問5 下に「は」が来て主語になっているのだから、「道済が」は名詞句でなければならぬ。省略されている語は、「ともによき」といわれているものである。

問6 動詞「入り」が連用形である点に注意(これが「入らなむ」であったら、「なむ」は〈終助詞〉である)。ここでの「なむ」は「な+む」という連語で、確実な推量を表す。

問7 「舞ひかなでて」とは、「舞って・舞いながら」の意味である。「いみじういどみかはし」(本文1行目) ていたライバル、それも

「何事も……上手を打ちける」(10行目) ライバルに勝ったのだから、嬉しくてたまらないのである。





## 4章

【問題】(漢習)

出典：『竹取物語』〈四 蓬萊の玉の枝〉／ オリジナル問題

### 現代語訳

そうこうしているうちに、男たち六人が、連れ立って庭に出てきた。一人の男が、文挟みに申し文をはさんで訴える。

「内匠寮の工匠、漢部の内麻呂が申し上げますのは、玉の枝を作らせていただいたことですが、五穀を断って千余日の間に努力いたしましたことは、並々ではありません。それにも関わらず、報酬をまだ戴いておりません。これを戴いて貧しい手下どもに頂戴させたのです」

と言つて、(文挟みを) 捧げている。竹取の翁は、この職人たちが申し上げたことを「何のことだろう」と、首を傾げている。皇子は茫然自失の様子で肝をつぶしてすわっていらつしやる。

この訴えを、かぐや姫が聞いて、

「この者が差し出している申し文を取りなさい」

と言つて、(取り上げた文面を) 見ると、書面で訴えていた趣旨は、

「皇子の君は、千日の間身分の低い職人たちと一緒に、同じ所に隠れ住み、立派な玉の枝を作らせなさつて、(できあがったら) 官職も下さらうとおっしゃいました。このことをよく考えますのに、『ご側室としていらつしやるはずのかぐや姫が必要になるのだらう』と承知致しまして、このお邸から(俸祿を) いただきたいと思ひます」

と書いてあり、

「当然戴かなければならない(『われわれは貰う権利があるので、俸祿を出さないのはおかしい』)」

と言つたのを見て、かぐや姫は、日が暮れるにしたがつて(日が沈むように気持ちが沈んで) がっくりと氣落ちしていたのが、晴れ晴れとした笑を取り戻して、翁を呼び寄せて言うには、

「本当の蓬莱の木かと思っていました。(しかし)このように驚きあきれた偽りごとだったので、早くお返ししてください」と言うと、翁が答えるには、

「はつきりと、作らせた物と聞いたので、お返しをするのはいとも簡単です」と、頷いて控えている。

**解答**

問1 ①〳〵ろく ②〳〵けしき ③〳〵そらごと

問2 (オ)

問3 このようにあきれた偽りごとだったので、**〔解答例〕**

問4 工匠たちに珠の枝を作らせたこと。**〔解答例〕**

問5 (4)

## 現代語訳

荒れた家で人の訪れもない所に、(その家の主人である) 女が物忌みなどで出仕を遠慮することがあった頃で、所在なく引き籠もっていたのを、ある人が御訪問になろうとして、(ほのかな) 夕月がさしてあたりが薄暗い時分に、こっそりと人目を避けて尋ねておいになったところ、犬がおおげさに吠えるので、下仕えの女が出て来て「どちらからおいでですか」と言うと、(男はその女に) そのまますぐに取り継ぎを請わせて中にお入りになった。(見れば) いかにも心細そうな有様、どんなふうにして過ごしているのだろうか、ひどく気の毒に思われる。みすばらしい板敷きに、しばらく立っておいでになると、しとやかに落ち着いた雰囲気で、(しかも) 若々しい声で、「どうぞ、こちらへ」という(女の) 人がいるので、開けたても窮屈そうな引き戸から、室内へお入りになった。

部屋の内部の様子は、それ程(屋敷の外見から想像されたほど) ひどくはなく、奥ゆかしく、灯火は向こうのほうにほのかにともっている(だけだ) が、調度の美しさなどが見えて、(来客があつてから) 急に焚いたとも思えない香の香りが(漂い)、大変家の人の人柄が慕わしく思われる住み方をしている。(女房が) 「門をよく閉めてくださいよ。雨が降るといけないから。御車は門の(屋根の) 下に(引き入れなさい)、御供の人はどこそこに(休んでいただきましょう)」と言うと、「今夜は安眠できそうです」と(侍女たちが) ひそひそとささやいているのも、(声を) 忍ばせているのだが、さほど離れていないので、かすかに聞こえる。

さて、(尋ねて来た男は、主人である女に) 近況のことなどを、こまごまとお話し申し上げになるうちに、夜更けの一番鶏も鳴いてしまった。以前のことから将来のことまでしんみりとしたお話の(続く) うちに、今度は鶏も華やかな声でしきりに鳴くので、(男は) 夜ももうすっかり明け果てたのかと思って(その鶏の鳴き声を) お聞きになるけれども、(この女の家が、人目を気にして) 夜の明けきらないうちに急いで帰らなければならないような場所でもないで、少しゆつくりしていらっしやるうちに、(戸の) 隙間が(朝の光で) しらんできたので、女の心に残る(あなたのことは忘れない、というような) ことを言つて(女の家から) 御出立になると、(木々の) 梢も庭も目の覚めるようにずうつと青み渡っている四月ごろの明け方、その優美で趣の深かった(当時の) 情景をお思い出しになって、(その後その家のそばを牛車でお通りになるときは、その家の) 桂の木で大きいのが(牛車から) 見えなくなるまで、今

でもお見続けになるということである。

解答

問 1 (オ) 問 2 (エ)

問 3 雨が降るといけない(から)。「解答例」

問 4 (ウ) 問 5 或人〔1行目〕

解説

問 1 傍線部(1)の「の」は格助詞である。格助詞の「の」と一口に言っても、実に様々な用法があるので、ぜひ辞書を引いてもらいたい。

傍線部(1)の用法は「同格」といわれるものである。現代語の「ビールの冷えたの」の類にあたる。ここでは、「荒れたる宿」と「人目なき」をこの同格の「の」が結んでいる。口語訳すると、「荒れた家で人の訪れもない家」となる。「人目なき」を「人の訪れもない家」とできるのは、この「の」の働きによるものである。以上がわかった上で、選択肢を見てみよう。

(ア)と(イ)は、「主格」の格助詞。口語訳すると、「くが」にあたるもの。(ウ)は「連体格」の格助詞で、連体修飾語を作る働きをしている。(エ)も(ウ)と同じ。近称の代名詞「此(こ)」についているだけの違い。(オ)が、傍線部(1)と同じ、「同格」の格助詞である。「桂の木で大きな木」の意。

問 2 傍線部(2)の前後の状況を簡単に説明すると、下衆女に取り継ぎを請わせて広間(板敷き)に男が立っていたところ、「こなた」という声があったので(部屋の)中に入った、というのがこの部分である。当然この声の主はこの家の人間なので、(イ)ではない。「こちらへ」と言って部屋の中に入るのだから、声の主は当然、部屋の中に居ると考えられる。そこから(ア)でもないことがわかるであろう。(ウ)と(エ)は悩むところであるが、「もてしづめたるけはひの若やかなるして」から(エ)を選ぶ。「もてしづむ」は「落ち着か

せる・目立たないようにする」という意味。「若やか」は「若々しいようす」。つまり控え目にはしているが、その若々しいようすまではかくせない、そんな女の姿が浮かんでこよう。

### 問3

ポイントはただ一点、「もぞ」である。「もぞ」は係助詞の「も」と「ぞ」があわさってできた連語。「将来起こりうる事態を予測して、それに対する危惧の気持ち（恐れ危ぶむ気持ち）を表す」ものとして使われるものである。ここでいう「将来起こりうる事態」というのは、ほとんどが悪い事態の予測である。従って、それに対する気持ちというのも「くすると大変だ・くするといけない・くすると困る」というもの。似たものに「もこそ」があるので、一緒に押さえておこう。

ここでは傍線部(3)の直前で「門をよく閉めてくださいよ」と言っている。なぜかといえば、「雨降る」という悪い事態を予測しているからである。

### 問4

傍線部(4)の部分を直訳すると、「夜の暗いうちに急がねばならない場所のようでもないので」となるか。しかし、これでは何だかよく分からない。そこでもう少し詳しく見てみよう。助動詞「べし」があることから、「夜深く急ぐ」ことが当然のことであると考えられる。では、急いでどうするのかということになるが、これはその後で男が「立ち出で給ふ」とあるので、「帰ること」と推測できる。つまり傍線部(4)は、「まだ夜の暗いうちに急いで帰るのが当然だが、そういう場所ではないので」と訳せる。では何故、「夜の暗いうちに急いで帰るのが当然」なのか、ということだが、これは当時の結婚形式についての知識が前提として必要になる。知らない人は、これを機会に覚えよう。平安時代の結婚は「婿取り婚」といって、男が女の家を訪ねるものであった。夜、女の許を訪れた男は翌朝帰るのであるが、その際人目につかないように夜の暗いうち、まだ夜が明けないうちに帰るのが習わしであった。結局傍線部(4)は、「人目を気にして夜の明けないうちに急いで帰らねばならない場所のようでもないの」ということになる。ここから考えれば容易に(ウ)が選べるだろう。

### 問5

敬語が理解できていれば簡単に判る問題だが、ここでは敬語についてはまだ学習していない、という前提で話を進める。まず、人物の整理をしておこう。設問に「本文中の語で答えなさい」とあるので、ざっと登場人物を拾い出してみると、「女・或人・下衆女・御供の人」の四人が拾い出せる。

次にこの場面について考えると、「艶にをかしかりしを思し出でて、……見送り給ふ……」とあるので、「艶にをかしかりし」、

つまりあの二人で過ごした趣深い一夜のことを思い出すことが可能な、「女」か「或人」であると絞れる。

さて傍線部(5)「見送り給ふ」だが、何を見送るのかといえばその前にある「桂の木の大なる」、つまり大きな桂の木である。この桂の木は、当然女の家にある。それが「見送」れる立場にあるのは、女の家から出ていく「或人」か「御供の人」である。従って、傍線部(5)の主語は「或人」と断定できる。

ところで、傍線部(5)を含む一文(「さて、このほどの事……」以下)の後半部分は、少々解釈がやっかいなので、簡単に説明しておこう。ここは、「女」と「或人」が一夜を明かした場面で、「忘れ難き事など言ひて立ち出で給ふに」とあるのは、もちろん「或人」が朝になったので帰るところでいいのだが、その後の「……曙、艶にをかしかりしを思し出でて」、さらに「今も見送り給ふとぞ」に注目してほしい。「とぞ」は、格助詞「と」に係助詞「ぞ」が付いたもので、物語の文末にあつては「〜と」ということだ」という意味を持つ。後にきて結びになるはずの、「言ふ」「聞く」「ある」などの動詞が略された表現をとることがある。そうすると「今も……」の部分は「今(で)も、お見送りになるということである」という訳ができよう。つまりこの話は、作者が人から聞いたことを書いたものと分かる。そうすると、傍線部(5)を含むこの一連の流れは、二人で過ごした趣深かった情景を思い出して、今でも桂の木を見送っている、という話の流れになる。

つまり、この部分は、昨日の夜のことを思い出して、朝、男が帰る際に桂の木を見送っているのではなく、過去にそういう事実があつて、そのことを思い出すので、今でもなお、その女の家の前を通るときはいつまでも桂の木を見続けている、ということなのだ。

出典：『搜神記』「新鬼」の一節 / 大分大学・改

## 書き下し文

南陽なんりやうの宋定伯そうていぱく、年少ねんしょうの時とき、夜行よゆくに鬼きに逢あふ。之これに問とへば、鬼言きいふ、「我われは是これ鬼きなり」と。鬼問きとふ、「汝なんじは復またた誰たれか」と。定伯之ていはくこれを誑あざむきて言いふ、「我われも亦またた鬼きなり」と。定伯復ていはくまたた言いふ、「我われは新鬼しんきなり」と。是こゝに於おいて共ともに行ゆき、道みちに水みづに遇あふ。定伯鬼ていはくきをして先まに渡わたらしむ。之これを聴きくも、了然りやうぜんとして声音せいおん無し。定伯自ていはくみづから渡わたり、漕そう催さいとして声わを作なす。鬼復きまたた言いふ、「何なにを以もつてか声おと有ある」と。定伯曰ていはくいはく、「新あらたに死しして水みづを渡わたるに習なづはざる故ゆゑなるのみ。吾われを怪あやしむ勿なかれ」と。

## 現代語訳

南陽の宋定伯が、若いころ（のこと）、夜歩いていると鬼（「死者の靈魂」と出会った。（定伯が、その正体を）鬼に尋ねると、鬼が言うことに、「私は鬼だ」と。（今度は）鬼が尋ねた、「おまえはいったい誰なのか」と。定伯は鬼をだまして言った、「私も鬼です」と。定伯はさらに言った、「私はなつたばかりの鬼（「死んだばかりの靈魂」です）」と。

そこで一緒に歩いていると、途中で川にぶつかつた。定伯は鬼を先に渡らせた。（その渡る音を）じつと聴いていたが、まったく音がしなかつた。（次に）定伯自身が渡ると、ざぶざぶと音がした。鬼がまた言った、「どうして音がするのか」と。定伯が言った、「死んだばかりで川を渡るのに慣れていないだけです。私を疑わないでください」と。



**解答**

- 問 1 ① 〓これ ② 〓ここに ③ 〓みずから

問 2 (a) 〓鬼 (死霊) (b) 〓鬼 (死霊) が川を渡る音 [解答例]

問 3 普通は姿を見るだけで恐れる死霊に対して、人間が親しく口をきき、さらに言いくるめてしまうところ。 [解答例]

出典：『唐詩紀事』／オリジナル問題

## 書き下し文

賈島舉に赴きて京に至りしとき、驢に騎りて詩を賦し、「僧は推す月下の門」の句を得たり。推を改めて敲と作さんと欲す。手を引きて推敲の勢を作すも、未だ決せず。覺えず大尹韓愈に衝たる。乃ち具に言ふ。愈曰はく、「敲の字佳し」と。遂に轡を並べて詩を論ず。

## 現代語訳

賈島が官吏採用試験を受けるために、都長安に着いた時、ろばに乗って詩を作っていると、「僧は推す月下の門（＝僧が、月光に照らされた家の門を押しあける）」という句を思いついた。だが、推（＝押す）という字を代えて、敲（＝たたく）としようか、と思つた。手を動かしながら「推す」と「敲く」のしぐさをしてみたが、なかなか決まらなかった。（夢中になって考えているうちに）思わず都の長官である韓愈（の行列）にぶつかってしまった。そこで（賈島はどうしてぶつかってしまったのかと）詳しくその（「推」か「敲」か迷っている）わけを話した。（すると）韓愈が言うには、「敲の字がいい」と。そのまま（二人は）馬首をならべてゆきながら詩を論じた。

## 解答

## 問1 門

問2 書き下し文Ⅱ未だ決せず。〔解答例〕／未だ決まらず。〔別解例〕 現代語訳Ⅱなかなか決まらなかった。〔解答例〕

問3 「僧推月下門」とするのがよいか、「僧敲月下門」とするのがよいか、ということ。〔解答例〕

「僧推月下門」という詩の一字を「敲」にすべきか悩んでいること。〔別解例〕

問4 (ウ)

問5

① 推敲すいこう

② 詩や文章をつくるのに字句をさまざまに練り工夫すること。〔解答例〕

解説

問1 漢文が「主(誰・何が)動(どうする)目(何を)」の語順であることさえ知っていれば、動詞「推」の後にある「月下門」が「何を」に相当するとわかる。この三語の中心は「門」なので、答えはこれだけでよい。

問2 「未」が再読文字であることに気がつけば、難しくない。「いまダ」(未然形+ズ)と訓読することを覚えておこう。「決」は、意味が「決まる」だから、読みも「キマル」とし、「いまだ決まらず」と訓読してもかまわない。ただ、漢文で動詞を訓読する場合、ふつうは音読みに古語のサ行変格活用動詞「ス」を付け、複合サ変動詞として読む。この「決」の場合だと、音読みが「けつ」だから、これに「ス」を付けて「けつス」となる。古語のサ変動詞は「せ(未然形)／し(連用形)／す(終止形)／する(連体形)／すれ(已然形)／せ・せよ(命令形)」と活用するから、傍線部(2)の書き下し文は「いまだ決せず」となる。漢文は、古語で訓読するから「いまだ決せず」とはならない。

「未」の意味は「まだない」。つまりこの部分を直訳すれば「まだ決まっていない」となるが、これでは前後とのつながりが悪い。そこで、意味をそのまま据わりをよくしたのが解答例である。漢文の表現方法では、過去のできごとでも日本語のように「〜た」という助動詞(またはそれに相当する語句)を付けない。したがって、日本語に訳す際は、そういう助動詞を補うことも必要である。

問3 傍線部(3)の主語が賈島であることを、まずおさえる。賈島の言葉を受けて、次に韓愈が「敲の字がいい」と言っているので、賈島が詳しく語った内容は、「僧推月下門」の句で「推」を使うべきか「敲」の字を使うべきか、ということであると推測できよう。また、それを考えていたせいで、韓愈(の行列)にぶつかってしまったという一種言い訳の意も含んでいるのが、この傍線部(3)の内容である。

問4 「苙」轡の部分、一番の手掛かりとなる。「轡」は、手綱をつけるために馬の口にふくませる金具のことである。つまり、「轡を並べる」の根本的な意味は、「馬を並べて進む」ということである(ここから、今では「いっしょに進む」という意味で使われることが多い)。したがって、正解はウ。

問5 この話のテーマが、「推」と「敲」のどちらの字を使うか、であることから、すぐ「推敲」という熟語が浮かぶはず。「推敲」の意味は、今更説明するまでもないだろう。

この話から「推敲」という言葉ができたのであるが、では「矛盾」「蛇足」「断腸」「杞憂」「完璧」といった熟語のもとになった故事がわかるだろうか。各自、調べてみよう。









会員番号	
------	--

氏名	
----	--